

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

1日

元日

赤口 軫

旧11月20日

月曜

妙法蓮華経信解品第四

委付財物

い ふ ざい もつ

「財物を委付せば」

長者は、生き別れた息子に出会い、財産を譲ることができたなら何の憂いもなくなるのだがと常に考えていました。

その財産とは金銀財宝ではなく、人々を幸せにできる仏さまの智慧のことです。

悟りを開いて得た智慧を、道に迷っている私たち衆生に委ねることができたなら、皆憂いなく過ごせるはずなのに、と常に心配している仏さまの親心を表しています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

2日

先勝 角

旧11月21日

火曜

妙法蓮華経信解品第四

しよばらもん

せつりこじ

## 諸婆羅門 刹利居士

「諸々の婆羅門・刹利・居士に囲まれて」

古代インドの社会の階級のうち、「婆羅門」は司祭者や学者、「刹利」は王侯貴族、「居士」は富豪のことです。

信解品に登場する長者は、婆羅門・刹利・居士に囲まれて取引をしている大富豪です。

さらに、高価な宝物で身を飾り、召使いを侍らせ、品格があり近寄りがたい存在であると表現されています。

仏さまの威厳を象徴している場面です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

3日

友引 亢

旧11月22日

水曜

妙法蓮華経信解品第四

即そく懷ね恐く怖ふ

「即ち恐怖を懷いて」

威厳にあふれる長者の姿を見て、息子は怖れを抱き、その門の前に立ったことを後悔します。人は尊い神仏やその教えに出会った時、敬意とともに畏怖の念を抱きます。息子は畏れ多いと感じ、罰が与えられるのではないかと逃げ出しました。しかし仏さまは罰を与えることはありません。常に慈悲をもって、私たちが罪を犯しても、憐れみ見守ってくださいます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

4日

先負 氏

旧 11月 23日

木曜

妙法蓮華経信解品第四

しつ

そう

に

こ

疾走而去

「疾く走って去りぬ」

息子は長者の姿を見て、このような高尚な場所  
は自分の居場所ではないと逃げ出します。

私たちもあまりにも高価なものは自分にふさわ  
しくない、もっと手ごろなものを選ぼうとして  
しまいがちです。

仏さまの慈心と凡夫の心の差は大きいのです。

しかし、最も勝れた教えを、信じ学ぼうとせ  
ず、逃げ出しては、いつまでたっても迷いの世  
界から抜け出すことができません。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

5日

仏滅 房

旧11月24日

金曜

妙法蓮華経信解品第四

けん し べん しき  
見子便識

「子を見てすなわち識りぬ」

長者は門の前に立っている息子を遠くから見  
て、すぐに我が子である気づきます。

私たちは仏さまのことを忘れていても、仏さま  
は常に私たちのことを覚えてくださっている。

私たちのような凡夫でも、どんな悪人であつて  
も見捨てはしないのです。

親が我が子の顔を見間違えることがないよう  
に、大慈悲の心をもって私たちが教えの門に入  
るのを待っていてくださるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

6日

大安 心

旧11月25日

土曜

妙法蓮華経信解品第四

使者し執しつ之し愈ゆ急きゆう

「使者これをとらうることいよいよ急に」

長者は召使いに門前の男を連れてくるようにと命じました。

強引に連れて行こうとする召使いの態度に驚いた息子は気を失ってしまいます。

長者の心を正確に受け止めていない召使いの強引な態度は、仏さまの教えを伝える者が陥りやすいところでもあります。

無理やりに引き込もうとしても、怯えさせ、正気を失わせる結果になりかねません。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

7

日

赤口 尾

旧11月26日

日曜

妙法蓮華経信解品第四

しいげれつ

志意下劣

「父その子の志意下劣なるを知り」

長者は息子が長い間貧しい生活をしていたので心が卑しくなり、高貴な暮らしをしている長者に怖れを懐いていることを知ります。

そこで長者は、息子にも他の者にも親子であることを告げずに、方便を用い別の方法で長者の生活になじませようと考えます。

迷いに満ちた暮らしの中で、心がねじ曲がり、正しいものの見方ができなくなると、そこから抜け出させるのは一筋縄ではいきません。

## 妙法蓮華經信解品第四

是以慙慙。每憶其子。復作是念。我若得子。委付財物。坦然快樂。無復憂慮。世尊。爾時窮子。傭賃展轉。遇到父舍。住立門側。遙見其父。踞師子牀。宝几承足。諸婆羅門。刹利居士。皆恭敬圍繞。

〈略〉

有如是等。種種嚴飾。威德特尊。窮子見父。有大力勢。即懷恐怖。悔來至此。

〈略〉

作是念已。疾走而去。時富長者。於師子座。見子便識。心大歡喜。

〈略〉

使者執之愈急。強牽將還。于時窮子。自念無罪。而被囚執。此必定死。轉更惶怖。悶絕躄地。父遙見之。而語使言。不須此人。勿強將來。以冷水灑面。令得醒悟。莫復与語。所以者何。父知其子。志意下劣。



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

8日

成人の日

先勝 箕

旧11月27日

月曜

妙法蓮華経信解品第四

が こん ほう によ  
我今放汝

「我、今汝を放す」

長者は息子の放免を召使いに命じると、息子は喜んで貧しい暮らしに戻っていききました。

面倒な仕事を任されていながらも、上司から「先に帰っていいよ」といわれてホッと一息、気が緩んだ状態に似ています。

「もう帰ってもいいよ」の一言で「助かった」と思うのが人情です。

しかし、問題は一つも解決されていません。先送りされただけなのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

9日

友引 斗

旧11月28日

火曜

妙法蓮華経信解品第四

みつ

けん

に

にん

密遣二人

「ひそかに貧相な二人を使わして」

長者は息子を放免しても、別の方法で自分のもとに引き寄せようと思いました。

貧相な容貌の二人を選び、息子のもとに送り、一緒に給金のよい汚物掃除の仕事をしないかと誘うようにと命じます。

自分と同じような境遇の者から誘われると、新たな道にも入って行きやすいものです。

しかも、今の貧しい境遇でもできる仕事だと安心させられればなおのことでしょう。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

10

日 水曜

先負 女

旧 11月 29日

妙法蓮華経信解品第四

こ によ じよ ふん

## 雇汝除糞

「汝を雇うことは糞を除わしめんがためなり」

長者が息子に与えた「除糞」とは、単に下劣な者の仕事というわけではありません。

「除糞」は、ただひたすらに煩惱を払う小乗の修行をあらわしています。

しかし、煩惱を払うことに専念して、小乗の境地にとどまっていると、さらに一段高い大乘の境地、仏の智慧には至りません。

仏さまはまずは方便として、小乗の修行をもつて悟りへの入口へと誘ったのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

11

赤口 虚

旧1月1日

木曜

妙法蓮華経信解品第四

せん しゅ ご け  
先取其価

「まずその価を取って」

息子は、自分にもできる給金のよい除糞の仕事だと聞いてもまだ信用せず、先に給金を受け取り、ようやく安心して仕事に就きました。

最初に報酬を受け取れるならやってみようかと動き出すのが凡夫です。

神仏に願い事をしてご利益を求め、信仰に入ることには似ています。

しかし、ご利益を受け取った後に、信じ学び、仏さまの智慧に近づけるかが重要なのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

12

先勝 軫危

旧1月2日

金曜

妙法蓮華経信解品第四

じん ど ほん しん  
塵土 全身

「塵土に身をけがし」

長者は、卑しい心持ちになっている息子を見て  
憐れみ、自ら粗末で汚れた服装をして、汚物を  
集める器を持ち、息子に近づきました。

これは、すでに煩惱を滅している仏さまが煩惱  
まみれの私たち凡夫と一緒に、身を持って導い  
てくださることの喩えです。

高みから見物しているだけでは、苦しんでいる  
人を救えません。ともに苦しんで、導いてくだ  
さるのが仏さまの慈悲なのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

13

友引 室  
旧1月3日

土曜

妙法蓮華経信解品第四

おに じゅうねん ちゅう

於二十年中

「二十年の中に於いて常に糞を除かしむ」

息子は、自分は劣ったものであると思い込み、二十年間も汚物掃除の仕事が続けていました。二十年間掃除をしているうちに、大邸宅の様子を理解し、長者の仕事も手伝える素養も身に付いてきました。が、まだ自分は劣った者だという思いを抱いています。煩惱を除く修行からコツコツと励み、大乘の教への入口に差し掛かったものの、まだ小乗の修行を捨てかねている状態です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

14

先負 壁

旧1月4日

日曜

妙法蓮華経信解品第四

いっさい ざいもつ

かいぜ しう

一切財物 皆是子有

「一切の財物は皆是れ子の有なり」

さらに年月を経て、息子は長者のすべての仕事を任せられるようになりました。

仕事だけではなく、心も清らかになってきたと判断した長者は、大勢の前で親子の名乗りを上げ、財産を譲ることを宣言しました。

コツコツと修行を重ね、いつの間にか迷いが晴れ、仏さまに近づいていくまで、お釈迦さまは父親のようにそばで見守ってくださいましたのです。

## 妙法蓮華經信解品第四

我今放汝。隨意所趣。窮子歡喜。得未曾有。從地而起。往至貧里。以求衣食。

爾時長者。將欲誘引其子。而設方便。密遣二人。形色憔悴。無威德者。汝可詣彼。

徐語窮子。此有作處。倍与汝直。窮子若許。將來使作。若言欲何所作。便可語之。

雇汝除糞。我等二人。亦共汝作。時二使人。即求窮子。既已得之。具陳上事。

爾時窮子。先取其衲。尋与除糞。其父見子。愍而怪之。又以佗日。於窓恭中。

遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵鈎。汗穢不淨。即脱瓔珞。細軟上服。嚴飾之具。

更著鹿弊。垢膩之衣。塵土鈎身。右手執持。除糞之器。狀有所畏。語諸作人。

〈略〉

由是之故於二十年中。常令除糞。過是已後。心相体信。入出無難。然其所止。

〈略〉

我名某甲。昔在本城。懷憂推覓。忽於此間。遇会得之。此實我子。我實其父。

今吾所有。一切財物。皆是子有。先所出内。是子所知。世尊。是時窮子。



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

15

日 月曜

仏滅 奎

旧12月5日

妙法蓮華経信解品第四

こん し ほう ぞう じ ねん に し

今此宝蔵 自然而至

「今この宝蔵 自然にして至れり」

息子は自分でも気づかぬ間に財産が長者から財産を受け継ぐことができた喜びを表します。

仏道修行をコツコツと続けることで、自分でも気づかぬうちに、間違った考え方が修正され、迷いが晴れて、悟りに近づいていくものです。

突然「悟った!」というのは怪しいものです。

図らずも財産を受け継ぐことになった息子のよ  
うに、永い時間をかけて信心を深め、自然に悟りに至るのが本筋でしょう。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

16

日

大安 婁

旧12月6日

火曜

妙法蓮華経信解品第四

さんく

## 三苦

「三つの苦しみ」

「三苦」とは次の三つの苦しみ。

① 苦苦（くく）：現在苦しいと感ずる苦。病気や事

故、人間関係などの悩みに直面する苦しみ

② 壊苦（えく）：楽しかったものが壊れる苦。死別

や権力・財力を失うなど苦しみ。

③ 行苦（ぎょうく）：無常をなげく苦。特段不幸で

はないが、不安や虚しさを感じることに。

「三苦」から脱するため説かれたのが、声聞が

執着していた方便の教えです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

17

赤口 胃

旧12月7日

日 水曜

妙法蓮華経信解品第四

戲論之糞

け ろん し ぶん

「戲論の糞を取り除く」

「自分は今どこに立っているのか」「何を見ているのか」「なぜ生きているのか」などを、よく考えたうえでなければ、悩みも解決できず、悟りへの道も進めません。

事実を確認せず、心が乱れたままに、いい加減で無責任な発言をすると、周囲を「戲論（けろん）」に巻き込んでしまいます。

「戲論の糞（あくた）」を取り除き、自分の立ち位置をしっかりと確認しましょう。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

18

日

先勝 昂

旧12月8日

木曜

妙法蓮華経信解品第四

いち

にち

し

げ

一日之価

「一日の賃金」

世俗の欲に惑わされず、安らかに過ごすことで満足しているのは「一日の賃金」を得るために働いているようなものだ。『長者窮子の喩え』は説いています。

もつと大きな財宝を得るためには、一切衆生を救える広大な教えを学び、自然に実践できるようにならなければなりません。

我々凡夫は、糞（あくた）を払い、「一日の賃金」をいただくことから始めましょうか。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

19

日

友引 畢

旧12月9日

金曜

妙法蓮華経信解品第四

しん ぜ ぶつ し  
真是仏子

「真にこれ仏の子なり」

私たちは仏さまの子として、仏さまと同じ悟りに至れる者であるのに、そのように考えたことがあったでしょうか。

そんな私たちにも仏さまは惜しむことなく親として慈悲を注いでくださいます。

私たちが迷い道から抜け出して、地道に修行に励んでいけば、赤ん坊が母親の乳を含むように、いつしか仏さまの子として財産を受け取ることができるとのことです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

20

日

大寒

先負 鶯

旧12月10日

土曜

妙法蓮華経信解品第四

ぎょう だい し しん  
楽大之心

「大を楽（ねが）う心」

『長者窮子の喩え』は人生の縮図です。

皆が長者と息子のように慈しみあっていくこと  
によって、世のなかで救われていくのです。

小さな自分を捨て、大勢の為に尽くすことが人  
間として存在する意味だと思えます。

自分が死した後も、仏さまから受け取った  
「宝」を次世代に受け渡し、幸せな世の中がい  
つまでも続いてほしいという思い。

それが「大を楽う心」です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

21日

仏滅 参

旧12月11日

日曜

妙法蓮華経信解品第四

むじょうほうじゆ ふぐじとく

無上宝珠 不求自得

「無上の宝珠 求めざるに自ずから得たり」

お釈迦さまは、煩惱を払う修行に没頭し世間を離れた生活をしてきた者でも、菩薩の修行を積み重ね、いつか仏に成れると説かれました。

はじめは、仏に成るなどと大きな願いは持っていなかった声聞たちも、努力すれば仏さまと同じになれるのだと気づき、この上ない宝が求めずして得られたようだと喜びました。

しかし、それで慢心することなく、日々の努力を悪れないようにしなければなりません。

## 妙法蓮華經信解品第四

今此寶藏。自然而至。世尊。大富長者。則是如來。我等皆似仏子。如來常説。

我等為子。世尊我等。以三苦故。於生死中。受諸熱惱。迷惑無知。樂著小法。

今日世尊。令我等思惟。橋除諸法。戲論之糞。我等於中。勤加精進。得至涅槃。

一日之餽。既得此已。心大歡喜。自以為足。便自謂言。於仏法中。勤精進故。

〔略〕

所以者何。仏知我等。心樂小法。以方便力。隨我等説。而我等不知。真是仏子。

今我等方知。世尊於仏智慧。無所慍惜。所以者何。我等昔來。真是仏子。而但樂小法。

若我等有。樂大之心。仏則為我。説大乘法。今此經中。唯説一乘。而昔於菩薩前。毀悦

声聞。樂小法者。然仏実以。大乘教化。是故我等。説本無心。有所及求。今法王大寶。

自然而至。如仏子所応得者。皆已得之。爾時摩訶迦葉。欲重宣此義。而説偈言

我等今日 聞仏音教 歡喜踊躍 得未曾有

仏説声聞 當得作仏 無上寶聚 不求自得



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

22日

大安 井

旧12月11日

月曜

妙法蓮華経信解品第四

ない へん た ごく

乃徧他国

「すなわち他国にも及び」

長者は他国とも取引がありました。

文化や習慣が異なる相手と交流するには、自

国の考えを押し通すだけでは破綻が生じます。

お互いに分かり合えるところから糸口を探し、

違いを認め合い、尊重することが大事です。

水が丸や四角い器にも収まりつつも、その本性

を失わないように、相手に応じて形が変わるよ

うに見えても、変わらない仏さまの慈悲と智慧

を長者は持っていたことを表しています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

23

日

赤口 鬼

旧12月12日

火曜

妙法蓮華経信解品第四

やく う ねん し

益憂念子

「益々子を憂念す」

長者は年齢を重ね、生き別れになった息子のことばかりを考えるようになります。

涅槃を控えた仏さまが私たち衆生を憐れむことの喩えです。

人それぞれの境遇によって、その悩み苦しみは千差万別です。

仏さまは、そのすべての苦悩を引き受けて、残らず取り除こうと、私たちが仏さまの元にたどりつくのを待っているのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

24日

先勝 柳

旧12月14日

水曜

妙法蓮華経信解品第四

たい

しょう

そう

せん

## 体生瘡癬

「体に瘡癬を生ぜり」

父親と生き別れになって放浪を続けた息子は、  
痩せこけて、体中に腫物ができていました。

体力があればウイルスや菌に対する抵抗力が具  
わり、感染症にかかりにくいといわれます。

心も同じで、お釈迦さまの勝れたお教えを身に  
着け、迷いに動じない状態であれば、欲望や誘  
惑に振り回されることはありません。

放浪して体力が衰えた息子が病を得たのは、正  
しい教えにはぐれ苦悩に陥ることの喩えです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

25日

友引 星

旧12月15日

木曜

妙法蓮華経信解品第四

ゆう にん てん でん

傭賃展転

「雇われ仕事を転々とし」

放浪を続けた息子は仕事を転々とし、苦勞を重ねてきました。

しかし、自分の思慮分別だけではうまくいかないこと、多くの人と協力して成し遂げられたこと、目に見えない力によって後押しされたことなど、苦しい経験をしたからこそ、後になつて気づくことがあったことでしょう。

息子が長者の宝を受け継ぐことができたのも、永い苦勞の下地があつてこそです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

26日

先負 張

旧12月16日

金曜

妙法蓮華経信解品第四

し ねん しやく びん

## 子念昔貧

「息子は貧しかった昔を思い出した」

息子は昔の貧しかった頃、心も卑しく長者が父であることすらわからなかったと回想します。

昔の自分は、宝を譲り受けるなどとは考えも及ばず、情けない境遇であったと思います。

自分が幸せになっても傲慢にならず、過去の苦しみを忘れずにいることが、世の中の苦しみに気づくことにつながるのです。

そしてすべての人々の苦しみを除こうと努めることが菩薩の道であり、仏への道なのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

27

日 土曜

仏滅 翼

旧12月17日

妙法蓮華経信解品第四

が とう ない めつ

## 我等内滅

「我ら内の滅」

声聞たちは、仏さまの教えを説き、世の人々を救うようにと説いてはきたが、自ら実践しようという望みを起こさなかったと反省しました。自分たちは「内の滅（自分一人の心の内の煩悩を除くこと）」で満足していたと気づいたのです。煩悩は他者と比べるところから生じます。人々を苦悩から救い、他者の喜びを自分の悦びとするところまでいかなければ、自分も救われないのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

28日

大安 軫

旧12月18日

日曜

妙法蓮華経信解品第四

かい しつ くう じゃく

皆悉空寂

「皆悉く空寂して」

「空寂」とは変化を離れたこと。

変化がなくなれば、生じること、減することもなく、迷いも煩惱もなくなります。

しかし、物事に囚われないようになる、世の中に関わり人々を救う事に対して喜びを持ってなくなってしまう。

父親と生き別れ、日銭を稼ぐことで満足していた息子の心持ちを、衆生救済にまで考えが及ばなかった声聞たちの心になぞらえています。

妙法蓮華經信解品第四

出入息利 乃徧陀国 商估賈人 無処不有 千万億衆 圍繞恭敬 常為王者 之所愛念

群臣豪族 皆共宗重 以諸緣故 往来者衆 豪富如是 有大力勢 而年朽邁 益憂念子

夙夜惟念 死時將至 痴子捨我 五十余年 庫藏諸物 当如之何 爾時窮子 求索衣食

從邑至邑 從国至国 或有所得 或無所得 飢餓羸瘦 体生瘡癬 漸次經歷 到父住城

傭賃展轉 遂至父舍 爾時長者 於其門内 施大宝帳 処師子座 眷属圍繞 諸人侍衛

〈略〉

昔於某城 而失是子 周行求索 遂來至此 凡我所有 舍宅人民 悉以付之 恣其所用

子念昔貧 志意下劣 今於父所 大獲珍宝 竝及舍宅 一切財物 甚大歡喜 得未曾有

〈略〉

如彼窮子 得近其父 雖知諸物 心不及取 我等雖説 仏法宝藏 自無志願 亦復如是

我等内滅 自謂為足 唯了此事 更無余事 我等若聞 浄仏国土 教化衆生 都無欣樂

所以者何 一切諸法 皆悉空寂 無生無滅 無大無小 無漏無為 如是思惟 不生喜樂



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

29

日 月曜

赤口 角

旧12月19日

妙法蓮華経信解品第四

う よ ね ほん  
有 余 涅 槃

「生きながら得られた悟り」

「空(変化を離れること)」で自分の煩惱を滅し、  
肉体のみを残した悟りの姿を「有余涅槃」とい  
います。

しかし「有余涅槃」は本当の悟りに達するには、  
まだ余地のある状態だということに気付かずに  
修行をしてきたのが声聞たちです。

一切衆生の苦しみを取り除き、ともに喜びを得  
るところに本当の悟りがあるのだと、法華経に  
至ってお釈迦さまに導かれたのでした。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

30

日 火曜

先勝 亢

旧12月20日

妙法蓮華経信解品第四

しん

ぜ

しょう

もん

真是声聞

「真にこれ声聞なり」

法華経を聞いて一切衆生を救おうという心持ちになった声聞たちは実は菩薩なのです。

しかしここでは、「真の声聞」と表しています。

それは、自分一人の煩惱を取り除こうと修行に励んだ結果が、一切衆生を救うための過程であり、その過程が重要なので敢えて「真の声聞」と表現しているのです。

その先は、仏と成るための道を歩み、他の人々救うために菩薩の道を進むのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

1月

31

日

友引 氏

旧 12月 21日

水曜

妙法蓮華経信解品第四

せ  
そん  
だい  
おん

## 世尊大恩

「私たちを憐れみ導いてくださる仏の大恩」

私たちは迷いのかたまりであって、物ごとの善い悪いを分別する力は残っています。

お釈迦さまはその力を信じ、見捨てることなく憐れみ導いてくださいます。

その大きな恩に報いるために、自分の中の仏性を目覚めさせ、煩惱を取り除き、他者の迷いを取り払い、菩薩の道を進まねばなりません。

そして、いつか仏さまの境界に達することが、何よりの恩返しになるのです。

妙法蓮華經信解品第四

住最後身	有余涅槃	仏所教化	得道不虛	則為已得	報仏之恩	我等雖為	諸仏子等
說菩薩法	以求仏道	而於是法	永無願樂	導師見捨	觀我心故	初不勸進	說有實利
如富長者	知子志劣	以方便力	柔伏其心	然後乃付	一切財宝	仏亦如是	現希有事
知樂小者	以方便力	調伏其心	乃教大智	我等今日	得未曾有	非先所望	而今自得
如彼窮子	得無量宝	世尊我今	得道得果	於無漏法	得清淨眼	我等長夜	持仏淨戒
始於今日	得其果報	法王法中	久修梵行	今得無漏	無上大果	我等今者	真是声聞
以仏道声	令一切聞	我等今者	真阿羅漢	於諸世間	天人魔梵	普於其中	応受供養
世尊大恩	以希有事	憐愍教化	利益我等	無量億劫	誰能報者	手足供給	頭頂礼敬
一切供養	皆不能報	若以頂戴	兩肩荷負	於恒沙劫	尽心恭敬	又以美膳	無量宝衣
及諸臥具	種種湯藥	牛頭栴檀	及諸珍宝	以起塔廟	宝衣布地	如斯等事	以用供養
於恒沙劫	亦不能報	諸仏希有	無量無辺	不可思議	大神通力	無漏無為	諸法之王
能為下劣	忍于斯事	取相凡夫	隨宜為説	諸仏於法	得最自在	知諸衆生	種種欲樂